

幕の向こうに見える、地域のチカラ

第3幕

つむ 紡いでいく

プロではない。座員は皆、農作業や仕事を持ちながら、人形芝居に打ち込んでいる。しかし、観客が感動してその舞台。そのことに誇りを持って、取り組んでいる。演じる側、見る側、双方の努力が地域文化を育てていく



外題 八百屋お七 吉常院の段

16歳になるお七は、火事で焼け出されて吉常院の近くで生活していた。そこで吉三郎と出会い、二人は恋に落ちてしまう。しかし、お七に恋心を持つ井長が、吉三郎のいない間にお七に言い寄ってくる。その気の無いお七は、機転を利かせて逃げ回るといふパロディタッチもある一幕。



1月23日、眺楽座で貸切の公演を行ったあと、地元原小学校の児童全員を招待した。幕が降りると児童からは、大きな拍手が送られた。

地域の伝統文化に慣れ親しむ

伝承館のそばにある原小学校。眺楽座では、平日の公演があった場合、その後に原小学校の児童を招待することもある。小さいころから地域の伝統文化に慣れ親しむことで、地域への愛着と誇りにつながる。公演を見た原小学校6年の福田有花さんは、「人形の動きや物語、今とは少し違う言葉づかいなど、見ていて楽しかったです」森安優月さんは、「やっぱり「八反返し」が面白く、最後まで飽きずに見ることができました」と話します。

二人とも、「この地域には、神楽もあり、そういった伝統文化を大切にしていきたいです」と口をそろえた。



もりやす・ゆづき 森安 優月さん



ふくだ・ゆうか 福田 有花さん

幕の向こうには、120年もの間、地域の大事な財産として、守っていきこうと大切にしてきた思いが詰まっています。

ここで終わり。いったん途絶えてしまうと、再興するときには想像もつかないような苦労があります。伝承には、そんなものも含んでいきます。だからこそ、伝えていく努力をしなければならぬんです。公演中、観客からは人形しか見えませんが、その幕の向こうには、地域の人たちが120年もの間、地域の大事な財産として、守っていきこうと大切にしてきた思いが詰まっています。こういった文化が市の中にあるということを知って欲しいと思っと思っていますし、絶対に続けていかなければならないものだと思います。



やまだ・ひろき 山田 博規さん (44歳・阿品)

座員の中で最年少。仕事を通じて眺楽座と関わり、33歳のとき座員となる。人形遣いを担当しながら、公演時の司会や渉外もやっている。眺楽座への問合せは、☎090-5378-3391山田まで

未来へ受け継がれるもの

現在、眺楽座では、年一回、さくらびあでの公演や、地元廿日市内の小中学校で公演を行うほか、各地で出張公演も行っている。また市民センターの教室や学校での体験学習も行い、若い人々に伝統文化に触れる機会を提供してきた。

こうした地域ぐるみの活動が評価され、昭和50年に県無形民俗文化財に指定。昭和54年には東京国立劇場での公演も成功させた。平成12年には、文化財保護功労者として文部大臣賞を受賞。また、平成16年にはサントリ地域文化賞も受賞した。さらに地域住人も「廿日市市人形芝居後援会」を結成し、財政面や、公演時の手伝いなど「眺楽座」の活動を支援している。そして、平成18年には常設の舞台「民俗芸能伝承館」ができた。「眺楽座」は、地域に支えられ、地域の財産として、未来への糸を紡いでいる。

「それぞれを信頼して、自分の役割を演じているからこそ、涙を誘う芝居が生まれる」。まちづくりにも同じことがいえるのではないだろうか。みんなが互いの価値を認めながら、互いの持ち味を發揮すれば、そこに大きな価値や魅力を生み出すことができるはずだ。